16-17

空想の序文

岸の国土

次に載した一文は、ジュウル・ルナアルが二十三歳の時（一八七七年）その日記に書きのこしたものである。それは、彼が書いてもつておかなければならぬ作品の序文として、彼の生涯に書くべき一冊の詩集を、人生、この愛すべき空想の序文に、彼の

献じ

文字は

全生涯をこめて書くことが出来ると思う。

十一月二日。白序曙堂。

わが愛する恋人よ、この詩集を君に献ずる。

ゼラニウム

君は、それを読んだ時、君の

らしから。そして、一方、僕の

愛は、さうすることを拒絶するのだ。君は、

それを読んでも、わかるといいにくいまつてゐる

からだ。しかし、僕はこれを言い張る。

なぜなら、これらの詩は、海峡の上

沿岸の碑

文研原製

で、ノルマンディの風景の一角で、森と草
叢の蔭の、日まじりの小径の傍で、
私たちのだから。そして僕は、そこで自分の
しっくりとした心のだ。ねえ、さうぢやよ
いか。可笑しみこそに、これうの浮き、孩
で僕と、京しい風景と伴へてゐる。
陽光のすれ抜く使かだ。こいつをひ
らげてみると、僕は、あの鴉の群
が飛んでゐるのを見ひせる。
僕は言ってそれを云ったことがある。その中に、
あっちこっち角をまって云った雪夜が、定って
ゐる、あい窓と、雪のやうな野菊と、
見すぼらしの全景の、
悲哀感かしい淋れやかな花壇の上を、
うくく年ひ上った。自分でたしかめる
詩を作る奴をんていちもりな、自分がゐる
ところに、ゐるためし
おいのだ。僕がおトレエんのソンネと
泣んでゐる夜や、苦しそうが傷物をしてゐて
も、僕はかまはずつゝけるぐらゐの

ユゴオの詩と読んでおる途中で。

こそすると、芸しまた彼女で、彼のおや
ぶがれんだとそって　来たら、彼女。
「ちょっと待て」と云わかも知れないのだ。
彼は、まれも、恋のあの感激を覚えて
る。君が優めてくれたって、それは彼に
ならない。君にわかる筈はないのだから。
だが、彼は、あの彼独に惚れた相手の美
彼が、この上もない魅力だった。一人の男の
心に、彼が愛し、まだ愛されているの女の間
柳はで、まれ、その

女が彼の之美の一つ一つに分る迄高鳴い
程年で、世はもはもよものはない。伊女は
その男がまれをもうとするのが
わかる。
ものはで、胸を、彼らし心を、柳は世
る。
も
だ

彼の最愛の者
伸
彼は彼傷するこてに
ちよ。
そうとがくが